

俳

句



「毘沙門天立像」 加藤 吉伸

鬼のパンツ

佐倉市（市内在勤） 稗田 寿明

両手を上げソファに深く沈む春
退院の母を迎へに花は葉に
春惜しむシール集めてもらふ皿
夜濯や鬼のパンツはいいパンツ
短夜や家族会議のままの椅子
禍もいつしか過ぎて芋嵐
皇帝と同じ名を持つ浮寝鳥

さんむ潮騒はるかに

下之郷 平澤千恵子

麦とろに海苔の香気や箸進む
梅雨寒に背を伝わる湯のあふれ
晩秋や奏でる虫は沈めけり
祖父示す王鵬けわし相撲道

花ミモザ

大堤 藤代百合子

蠟梅を咲かせし翁恵比須顔
白梅の古木讃えし偕楽園
正直に生きてきたねと石露の花
花ミモザ特急電車見送りぬ
残菊や主無き家の庭の隅
離れてはまた枝先に赤とんぼ
艶やかな甘き香りや冬の百合

祭笛

本須賀 川島 隆

成田への機影を染めて梅雨夕焼
梅雨明けや張り出す海の高気圧
片白草咲ひて木下の暮れ残る
槇垣を刈つて祭の支度かな
浜風や遠く近くに祭笛
満天の星干梅の匂ひけり
梅干すや笹に吾が家の歴史あり

西瓜の花

九十九里町（かずさ俳句会）

石橋 利子

米糠をまけば小鳥来庭畑
隠元の初挽ぎなれば一握り
朝起きて夢のふくらむ花西瓜
独り住む青葉若葉の庭の景
誕生日鰻重予約の待ち時間
そつぽ向く向日葵ひとつ道すがら
豊作の兆しの見えて稲の花

日輪草

蓮沼 石橋ゆり子

少年の未来は無限日輪草
風薫る子ども七人横断中
待ちかねる桜見上ぐる今朝も雨
初詣まず正座して大太鼓
初春や笛の音流る刑部岬
冬晴れの磐梯山に迎えらる
分かち合う鳥虫人や柿たわわ

西行花行脚

埴谷（さんぶの森吟行俳句会）

大掛 史子

芭蕉も訪ふ西行の像花ふぶき
義清のりきよの面輪宿して花に坐す
女院への思慕断ち西行花行脚
歌仙巻く花も恥ぢらふ秀名句
花びらと化して鬼消ゆ安吾の書
した、した、した、『死者の書』怖し梅雨真中
ひと夜にて蓮の曼陀羅織りし姫

四季を称ふ

横芝光町（さんぶの森吟行俳句会）

鵜澤 正信

行く春やデイゴの島の防空壕
葉桜となりて日常戻る街
真ん前に借景の嶺夏料理
鯪うなぎの泳ぎだすやに夏の雲
寝々ががたる巖紅葉且散る妙義山
無花果の痛々し程裂けて熟れ
半開き扉の祠雪女郎

下町散歩

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

本堂 良衣

鳩居堂の一筆箋や春浅し
花万朶^{ばんだ}上野公園暮れきれず
宮鳩の翔ちて三社の祭かな
初夏や谷中銀座のメンチカツ
浅草や「どぜう」と染めし夏暖簾
青年が凜しくみえる大神輿
湯豆腐や何話すでもなき二人

空き家

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

神保ミツエ

塞がれて空き家のポスト梅香る
たんぽぽの茎の長さや無人の居
下校の子実梅つまむやもぬけの居
去ぬ燕軒にふたすじ糞の白
崩れゆくかやぶきの家蟬時雨
軒止り屋根に登れぬ蔦紅葉
柿たわわ移住の人のものとなり

春の宵

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

能瀬 五月

さよならと言へぬ別れや春の宵
裏山の風のささるぐ竹の秋
囀の絶対音感森に聴く
ぼうたんの花びら回る朝の風
泣き声も頼もし嬰や鯉幟
コスモスの風を育てる休耕田
林檎剥く皿に八個の兎かな

八月や

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

山田由紀子

咲き満ちて紅白梅のはらと散る
ほつほつと昔語りや炉明りに
天涯へと五月のみどり埋めつくす
けしの花散れば隠るる草深野
八月や小さき詩集の反戦歌
日矢一閃樹間を走るくもの糸
現し世と古代のはざま焚火の香

まろき乳房

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

戸村真理子

今年はまだ猫も家族や漱石忌
幼な子にグリム語りて聖夜かな
冬ざれの鉄塔照らす入日かな
春光や瀬戸の小島の日和山
遠州に生まれ立夏の風揚がる
母の日や土偶にまろき乳房あり
パドックを勇む新馬や風薫る

冬銀河

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

崎谷 弘子

立ち漕ぎの少年の背や風光る
紫陽花や話の尽きぬ女どち
黙破る夏鶯や薄ぐもり
闇の使者水の使者かと川蜻蛉
蟻地獄昆虫好きのまた一人
夏の蝶たしかに辿る風の道
向ひ合ふ一瞬と永久冬銀河

大花野

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

浅野 重子

手に盛りてこんなに食ふか年の豆
大南風竿のズボンの踊り出す
教室のカーテン閉じて夏休み
うなじ見る合せ鏡や夏簾
冬ごもりガラス戸越しの日の温み
丸木橋渡ればそこは大花野
片恋やビール片手に一人鍋

五山の火

八街市(さんぶの森吟行俳句会)

藤卷 佳子

桜堤みなよき顔で擦れちがふ
乗鞍の風をはらむや水芭蕉
老鶯や海風ときに荒ぶ山
初蟬のとぎれとぎれや雨後の森
廃校の夏合宿やマーチング
精霊のすべてを送り五山の火
戸隠山締めは新蕎麦ぼつち盛り

令和の夏

横芝光町（かずさ俳句会）

向後

寛

砂時計立てて夢見る夏の夜
朝顔の小さく咲くや瑠璃の色
一杯の酒に酔ひ痴れ夏の宴
大陸や敗走千里真夏の日
駅広場祭囃子の音に踊る
コロナ禍を碎けと神輿揉みに揉み
プーチンもトランプも人の子夏風

日傘

小松 齊藤 利治

梅雨くぐり未だ色薄き赤トンボ
コンビニを出でて女が日傘差す
ミンミンが思いの丈を六拍子
七月や父に似て来し己が顔
紫陽花や哭くだけが人棺の前
のど迄も炬燵に入りて二度寝かな
病室はクシャミ屁もあり年の明け

私の俳句

高富 吉村 孝子

シリウスの光でもやす私の恋
流水この目で見たしいつの日か
職場にて主人雪かき大変だ
しこしこと夫としこむ夏みかん
パトカーに誘導されて鴨が行く
つゆ晴れのありがたさ知り仕事する
大谷さんひまわりの種そそがれる

初蜻蛉

木原 伊藤みや子

書初や辰の一字へ衿正す
梅錆びて野菜出荷の音高し
初蝶や余生いつ迄恙なく
菊挿すや年甲斐もなく一工夫
鬼子母神の手彫りの痕や青田風
拭ききれぬ猛暑の汗に争えず
誕生日迎える稚児や初蜻蛉

夏座敷

荒草のいよよ盛りや夏はきぬ
ピンポンに居留守を使う夏座敷
突然に屋根打つ音の時雨かな
老鷺や手間取る齡針仕事
ほつとする日の傾きし夏の夕
梅雨明けや午後の日差しの静かなり
リハビリの同年同志秋隣

心静かに

年始め走る看護師にこやかに
よもぎ摘むひと葉ひと葉に広がる香
朝の椀広がる独活の味うれし
音も無く飛びゆく影や鬼やんま
暑き風遠くにひかる波静か
読み返す母の日ハガキ小さき字
雨音のごとく耳鳴る夜寒かな

森 石橋八重子

待ちながら

辻横切る触れの遠音や秋相撲
秋立や祭まつりの余興よきの芸人衆
衛星が示す深手や台風圏
業の雨怯みてをりしすがれ蟲
経詠みの背にそよふく秋団扇
黄落の佇むるち木誰そ待つ
雀羽や待つも飽ひたか借命忌しゃくみんぎ
(石田波郷忌)

東金市(山武俳句会) 木村 一夫

大猛暑

不如帰傍若無人寅の旅
若葉風兄の納骨昭和の日
垣根越し百花繚乱ミニ花壇
朝の試歩大地踏む足杖を借り
夏疲れ帰省疲れに人疲れ
大猛暑五臓六腑も悲鳴あげ
台風来早めに先祖送り火し

森 遠藤三千代

富田 相葉 正子

植田

本須賀 今関 紫苑

えびね蘭伽羅の木下に咲く五輪
やはらかな色さまざまや木の芽風
朝掘りの筍とどく糠添へて
風そよぎ水まんまんと植田かな
大輪のハイビスカスの蜜柑色
水撒くや樹々の間に風生まる
ただけし極暑の空へ大銀杏